

増補改訂版 20世紀の日本美術

[目次]

序章——西洋から日本へのまなざし

西洋から日本へのまなざし……………10

第1章——19世紀の日本と西洋との出会い

1—新技術とその反動

高橋由一……………20

実験的試みへの意欲……………26

「見世物」……………32

2—用語定義の作業

言葉と概念……………39

「洋画」と「日本画」……………44

洋画……………45

日本画……………52

第2章——湧き立つ大正

1—最盛期

20世紀初頭の日本……………66

表現手段の自由化と組織の改革……………67

キリスト教の影響……………76

2—岸田劉生とでろりの美

歴史的位置づけ……………86

劉生の歩み……………88

リアリズムの選択……………91

デカダンス……………98

偶発事からグロテスクなデフォルマシオンへ……………104

3—アヴァンギャルド

最初の手がかり……………112

日本における未来派……………113

マヴォ……………117

第3章——大戦前夜、ひろがる危機感

1—国民美術のために……………138

プロレタリア芸術運動とその弾圧……………139

ローカル・カラー……………142

真をつくる、我にそくす……………147

2—大衆芸術の発展

ピクトリアリズムからの脱却……………155

大衆へアピールする絵画……………160

3—安定のない調和のために

シュルレアリスムの誕生と発展……………166

抽象芸術の復活……………173

第4章——大戦下の芸術家

1—国家総動員のイデオロギー

国家体制……………180

芸術家と国民の団結……………188

ドイツ、イタリアとの関係……………190

検閲と弾圧、周縁での自由	193
国家総動員態勢	195
2—戦争体験	
既出のイメージに訴えかける	203
藤田嗣治と玉碎図	206
リアリズムとアヴァンギャルドの疲弊	214

第5章——語ること、再建すること

1—ゆるやかな復興	
総決算期	222
アメリカの存在が与えた影響	225
美術家の戦争責任をめぐる議論	227
美術界の再編成	229
新たな表現対象へ	235
美術政策の広がり	241
2—復活	
直面する死	250
体験に顔を与えるということ	252
荒ぶる力による発見—「具体」の場合	256
3—増長	
アンフォルメル	267
反芸術運動	272
ポップアート	278
パフォーマンス	281
コンセプチュアル・アート	284
増殖の芸術	285

第6章——開放と自閉の20世紀末

1—新しい枠組み	
歴史的時間と社会情勢	294
新しい政策の手法	295
新しい学問分野としての近代日本美術史	297
日本美術の範囲とは?	299
クリエーションの意味の再構成	302
2—「もの派」と対象物による啓示	
ものの経験	308
異なる感性	312
ポスト「もの派」	319
3—眼の氾濫	
荒木経惟と私写真の跳梁	326
生とフィクションとの間	330
スーパーフラット	335
3.1 1 後	344

終章——ひとつのモチーフの展開

参考文献目録——— 354

訳者あとがき——— 363

索引——— 366

著者紹介／訳者紹介——— 379 / 380